

## アリシア先生の教え子

——『100人の子供たちが列車を待っている』と  
「こども映画教室」

土肥悦子 (シネモンド代表、こども映画教室代表)

2004年から毎年、「こども映画教室」を金沢で開催し、今年からは首都圏でも開催している。視覚玩具のワークショップ(以下WS)、映画鑑賞WS、そして映画制作WSが主な活動だ。

そもそも、この「こども映画教室」のモデルはイグナシオ・アグエロ監督の傑作ドキュメンタリー『100人の子供たちが列車を待っている』に出てくるアリシア・ベガ先生がやっていた「こども映画教室」だった。映画などみたことのない子どもたちにリュミエール兄弟の『列車の到着』を見せ、ゾーエトロープを使って映画の原理を教える、そんな素敵な教室。「こども映画教室」をやるならばこれしかない！ 私はビデオを借りて、映画の中で描かれる授業のすべてをメモした。でも待てよ……独裁政権下のチリの貧民街に生きる子どもと、2004年の日本の子ども

——あまりにかけ離れている。そもそも紙で作った視覚玩具など、ゲームで育った子どもが喜ぶのだろうか？ 蓋を開ければ、日本の子どもたちは映画のなかの子どもたちと同じように、自作のゾーエトロープで動かない絵が動いた瞬間、歓声をあげ、目を輝かせたのだ！

この映画が何より素晴らしいのは、アグエロ監督が子どもたちの変化を敏感に察知し丁寧に映し出していることだ。子どもたちは映画教室を通して、自信をつけ、自尊心を芽生えさせていく。映画の楽しさそのものが好奇心を呼び起こし、子どもたちは自ら知りたいたいと思い、学ぶことを楽しんでいる。親が我が子の成長に驚きの声をあげるのを聞いたときの子どもの誇らしげな顔！ これは日本でもまったく同じだ。

私たちが行う映画制作ワークショップでは初めて出会った子どもたちが3

日間でお話づくり、撮影、編集、上映までを主体的に行う。ここで大事なのはほんのりと出会うこと、大人が手出し口出しをしないことだ。必ず一線で活躍する映画監督を招き、監督なりの「映画観」をじっくり伝えてもらう。マニュアル的な映画の作り方は教えない。何を撮りたいの？ どうしたらいいかな？ と子どもたちが自ら考えるようになるがすだけだ。

映画にはたくさんの持ち場があり、誰でもどこかに活躍の場があるのがいい。その上、映画完成というゴール目指してチームで走るの、知らない同士でもコミュニケーションを積極的に取るようになる。そして作りたいと思ったものを仲間と真剣に作り、お客さんに観てもらう時の達成感は大きな自信につながり、子どもたちは目に見えて成長する。

アリシア先生の教え子はここ、日本にも増え続けている。アグエロ監督の新作『サンティアゴの扉』を山形で観られるのが何よりの楽しみだ。

### ■上映

『サンティアゴの扉』【IC】 ..... 10/11 15:30- [A6] | 10/13 12:30- [CL]

### ■上映&トーク

「映画を学ぶ、映画を作る —— イグナシオ・アグエロ監督特別講義

+上映(『100人の子供たちが列車を待っている』)」

10/15 17:00-19:30 [F4] | 入場無料